第2回口腔心身リエゾン談話会

和気裕之 Hiroyuki Wake，尾口仁志 Hitoshi Oguchi，島田 淳 Atsushi Shimada
杉本是明 Koreaki Sugimoto，玉置勝司 Katsushi Tamaki
口腔心身リエゾン談話会世話人

2022年4月24日（日），13時より第2回口腔心身リエゾン談話会がWeb形式で開催された．シンポジウム開催にあたって，代表世話人の和気裕之より本会の趣旨説明がなされた．

口腔心身リエゾン談話会は，口腔顎顔面領域で心身医学的要因の影響が大きく，歯科医師のみでは対応の難しい患者を対象に図1のような考え方で取り組んでいる．すなわち「脳と身体の心身相関」「社会環境との相互作用」に注視して，Bio-psycho-social modelとして捉えて診ていくことである．そして医師・歯科医師・看護師・歯科衛生士・心理臨床技術者などが，垣根を超えて対等な立場で強く連携する多職種協働を目指している．

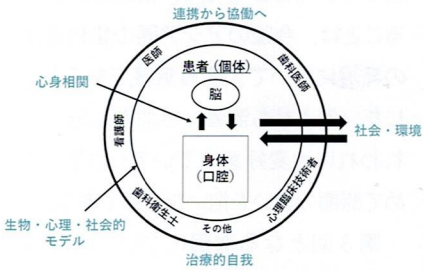

図1 口腔心身リエゾン談話会のコンセプト

【シンポジウムの概要】

1．心理社会的要因から考える歯科におけるCureとCare（島田 淳・神奈川歯科大学附属病院特任教授）

近年，患者の訴えが多様となり，う蝕や歯周病などの器質的疾患においても心理社会的要因を考慮する必要が生じている．患者の主観的問題（解釈モデル）と歯科医師の解釈モデルに乖離が生じていると，患者が満足する治療にならないため，歯科医師は患者の主観的問題に歩みよる必要がある．そしてこの乖離は，心理社会的要因の関与が大きい場合に起こりやすく，これを解消するため歯科医師は，患者の訴えを聴き，訴えに対処しながらも患者自身が症状と心理社会的要因との関連に気づくことを促し，自ら立ち直るのを根気強く待つ姿勢が必要となってくる．このような医療までたどり着いたとき，歯科におけるCureはCareとしての意味をもつようになる．

2．認知行動療法の理論と口腔心身症に対する実践（前田駿太・東北大学大学院教育学研究科臨床心理学コース准教授）

心理療法である認知行動療法は，主にうつ病や不安症などの精神疾患へのアプローチとして知られているが，近年では口腔心身症に対する実践にも活かされつつある．Burning Mouth Syndromeに対する適用はその代表例であり，痛みに関する破局的思考に焦点を当てたプログラムの有効性が実証されている．その一方で，診断学的な症状と適用すべきプログラムは一対一対応するとはいえず，実践の際にはあくまでも個々の症例のアセスメントに基づいた対応が求められる．また，認知行動療法の実践には，患者との良好な治療関係の形成がきわめて重要であり，口腔の痛みや異常感に関する本人の体験を否定せずに治療者が理解しようと試みることは欠かせない．

3．心身相関の中枢メカニズムの解明を目指して：ラットを用いた基礎研究（中村和弘・名古屋大学大学院医学系研究科統合生理学教授）

脳の中には心理ストレスや喜怒哀楽などの情動を処理する「心」の領域と，「体」の状態を調節する領域が存在し，密接に連関することで「心身相関」とよばれる現象が起こると考えられている．しかし，この「体」を調節する重要な中枢神経システムである交感神経制御の神経回路が，どのようにして「心」の脳領域から影響を受けるのかは全く不明であり，その仕組みが世界の研究者によって長年探し求められてきた．これまでの実験結果から，内側前頭前皮質（DP/DTT）から視床下部背内側部（DMH）への神経路は，「心」と「体」の脳領域をつなぐことで，心理ストレスによるさまざまな交感神経反応やストレス逃避行動を起こす重要な仕組みであることが明らかになった．

第3回口腔心身リエゾン談話会のお知らせ

2022年11月13日（日）13時より開催します．歯学領域から和嶋浩一先生（慶應大学非常勤講師），医学領域から杉本是明先生（黒松内科すぎもとクリニック院長），心理学領域から高橋美保先生（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース教授）を予定しています．本会への入会および第3回への参加の問い合わせは下記までご連絡下さい．

事務局：神奈川歯科大学総合歯科学講座顎咬合機能回復分野 玉置勝司
tamaki@kdu.ac.jp